

# 「英国19世紀の園芸雑誌の研究

——ガーデニング文化の大衆化の視点から」<sup>1</sup>

新妻昭夫(人間環境学科)

研修期間(2006年度前半)を利用し、園芸文化研究所の助成研究「19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究」<sup>2</sup>で着手していたテーマのうち、この時代に矢継ぎ早に刊行された「園芸雑誌」類の調査を本格的に開始した。王立園芸協会(RHS)リンドリー図書館で各雑誌の創刊号を調べるとともに、先行する研究書などをもとに60種類以上の雑誌類をリスト・アップすることができた。

雑誌を調査対象に選んだのは、雑誌にはその時代の社会状況が直接に反映されていると考えられるからであり、逆にいえば、その時代の社会状況に雑誌があたえた影響には無視できないものがあるからである。私が以前の研究テーマで気づいた雑誌と時代との関係については、別稿「ガーデニング雑誌という世界」(1ページ)で述べたので参照されたい。

雑誌は媒体(メディア)である。時代の言説<sup>3</sup>は媒体を通じて形成される。19世紀という時代には活字媒体しか存在しなかった(電波媒体<sup>4</sup>の出現には、20世紀を待たねばならない)。なかでも雑誌は、単行本類にくらべ発行部数が抜きんでて多く流通範囲もきわめて広い。この時代のガーデニング(園芸)をめぐる言説の形成に、雑誌のはたした役割はきわめて大きなものであっただろう。

この研究は、いまだ表面的なことがらの分析に着手したにとどまっている。広大かつ奥深い分野であり、一人で手をつけるのは無謀だったのかもしれない。予報の準備段階のような報文となることを、あらかじめ弁解し

ておきたいである。

本論に入る前に、用語についても弁解しておけば、本稿では「園芸 (Horticulture)」と「ガーデニング (Gardening)」を基本的に同義語として扱い、文脈によって恣意的に使い分ける。言葉の原義からいえば、「ガーデニング (Gardening)」には「造園」の技術とデザインだけでなく、造園された庭に植え込まれる植物の栽培や管理の技術や知識も含まれる。それに対して「園芸 (Horticulture)」は、18世紀になって使われるようになった新語(『OED』によれば、初出は1678年)で、「ガーデニング」のもともとの意味のうち「造園」的な部分を除いた、植物の栽培技能だけを意味するとされる<sup>5</sup>。しかし今日の家庭園芸をみても、ごく小規模であれ、デザインなど「造園」的な部分がないわけではない(この二つの用語の定義と使い分けについては、将来の課題として強く意識していきたい)。

「ガーデナー (gardener)」の日本語表記にも苦慮し、やはり恣意的に使うこととなった。この言葉の意味は時代によって大きく変化し、古い時代では職人的な「庭師」あるいは土建業的な「造園業者」と呼ぶのが適切だが、後の時代にはアマチュアの愛好家としての「ガーデナー」が浮上し、それが今日にいたっている。

また表題は「雑誌 (Magazine)」としたが、じっさいには「週刊新聞 (Weekly paper)」<sup>6</sup>を重視することになるだろう。雑誌とも新聞とも呼べないような「定期刊行物 (Periodical)」や「分冊出版物 (Part work)」も混じることになる。

### (1) 園芸雑誌のリスト・アップ (材料と方法)

予備調査段階では、Elliott (1993) と Desmond (1977) の2編の先行研究を見つけていた。そのうち後者のほうが圧倒的に詳細な研究であり、この文献にもとづいて下調べを行っていた。しかし、RHS リンドリー図書館での調査をはじめてまもなく、Wilkinson (2006) が刊行されたことを知った<sup>7</sup>。Wilkinson (2006) は先行する二人の研究を踏まえたうえで、さらに詳細な調査と考察を加えている。とくに巻末の付録 I 「ヴィクトリア朝のガーデニング雑誌類」には各雑誌がアルファベット順にリスト・アップされ、それぞれ

の要点が簡潔に整理されている。また第2部「庭作りを学ぶ」の第3章「情報の探求」では、各雑誌の編集方針や雑誌間の競合関係をはじめ、時代の流れと園芸雑誌文化の興隆（と衰退）、そして園芸文化へのこれらの雑誌の貢献が検討されている。

そこで英国の19世紀の園芸雑誌類を、まずWilkinson（2006）の巻末付録Iをもとに、ただしアルファベット順ではなく創刊年順にリスト・アップし、それを2編の先行研究（Desmond, 1977; Elliott, 1993）で補足し、さらに私自身の断片的な予備調査結果でおぎなってみた。その結果が付表Aである。各雑誌の誌名の末尾に付したD・E・Wは、参考にした各文献の著者の頭文字（Nは私自身の頭文字だが、手にとったことがあるぐらいに受け取ってほしい）。また〔△△〕は私の推測。なお値段については、10進法の制定（1971年2月15日）以前なので、通貨単位は1ポンド（£）= 20シリング（s.）、1シリング = 12ペンス（d.）である。当時の英国の物価を今日の日本のそれに比較することは困難だが、大雑把に考えて1ポンド = 1～3万円であり、したがって1シリング = 500～1500円となる。2シリング半つまり半クラウンの雑誌は2500円、1シリングの雑誌は1000円、6ペンスの雑誌は500円、といったあたりが目安となるだろう<sup>8</sup>。

付表といいつつ、現実にはいたずらに長い羅列になっているのは、調査の途中だからというだけでなく、玉石混交といたいほど各種の雑誌が乱立しているからである。期間が100年余りにおよび、社会全体が大きな変化をとげた時代であれば、むしろ当然というべきなのかもしれない。この付表の約100年間にカバーしている時代は、産業革命のただなかから、ヴィクトリア女王が即位して、ガーデニングの黄金期ともいわれる時代が急成長期と成熟期を迎え、さらに世紀末から第一次大戦直前という次第に暗鬱としていく時代にまでいたっている。また園芸やガーデニングの主要舞台と見なされてきたロンドン園芸協会（後の王立園芸協会：RHS）だけを考えても、1804年に創設されてから19世紀半ばまでは混乱期といってよく、またその後も財政難や組織運営の混乱に何度も見舞われ、RHSが今日のような姿になるのは第二次世界大戦後と考えたほうがいいのかも<sup>9</sup>。

## (2) 各雑誌の継続期間と時代の変化——短命雑誌と長命雑誌

付表Aにリストした65種類の園芸(ガーデニング)雑誌は、いわば玉石混交である。「玉」と「石」を区別する基準はさまざまあるだろうが、ここでは雑誌の発行が継続された期間を基準に選んでみた。読者に支持され社会に認知された雑誌は発行が継続され、そうでないものはすぐに廃刊されたであろうからである。

付表Aにリストした雑誌を、年代ごとに継続期間によって集計した結果が表1である。誌名が変更されて継続された場合や、他誌と統合されて継続された場合は、基本的に無視した。また編集長の交代も基本的に無視した。こういった言い訳をしなければならないこと、また継続期間の区分の荒っぽさを見れば、この表がかなり大雑把なものであることはあきらかだろう。それでもこの表1から、いくつかの点を指摘することができる。

第一に、創刊後2年以内に廃刊された短命雑誌が1850年代に集中していることが注目される。短命雑誌が次々に創刊されるというのは、その時代の園芸(ガーデニング)をめぐる社会状況の混乱を反映していると考えていいだろう。

表1:短命雑誌と長命雑誌(ゴチは彩色図版雑誌、イタは週刊、網掛けは20年以上継続)

年代	2年以下	3~5年	6~10年	11年以上
1780				<b>(02)</b>
1790				
1800				<b>(03)</b>
1810				<b>(04)(05)</b>
1820		<b>(10)</b>	<b>(11)(12)</b>	<b>(06)(07)(08)(09)</b>
1830		<b>(15)(17)(23)</b>	<b>(13)(14)(20)(21)(22)</b>	<b>(16)(18)(19)</b>
1840	<b>(26)(27)(32)</b>	<b>(28)</b>	<b>(24)(29)(30)</b>	<b>(25)(31)(33)</b>
1850	<b>(34)(35)(36)(37)(39)(40)</b>	<b>(38)(41)(42)</b>	<b>(43)</b>	<b>(44)(45)</b>
1860	<b>(46)(50)</b>	<b>(47)</b>		<b>(48)(49)(51)(52)</b>
1870			<b>(53)</b>	<b>(54)(55)</b>
1880	<b>(60)</b>	<b>(56)</b>		<b>(57)(58)(59)</b>
1890			<b>(61)</b>	<b>(62)(63)(64)</b>
1900		<b>(65)</b>		

比較のため表2として、各雑誌の創刊年と廃刊年(誌名変更や他誌との統合を含む)を集計してみた。この表2から、混乱の時代が1850年代(短命雑誌が突出していた年代)に限らないこと、むしろその10年ないし20年前から混乱がはじまっていたことがわかる。創刊と廃刊が急激に増加しはじめたのは1830年代であり、その後、およそ30年間の混乱期をへて、1860年代にようやく落ち着きはじめたといえることができる。

長命雑誌を表1で見ると、11年以上継続した雑誌についても、また20年以上も継続した雑誌(番号に網掛け)についても、1850年代とその前後の時代を比較して大きな変化は見られない。ただし、1820年代から30(～40)年代と、1860年代から80年代に長命雑誌の創刊がやや目立つといいのかもしれない。だとすれば、その間の1850年代だけは、長命雑誌も含めて、園芸(ガーデニング)雑誌市場が低迷していたといいだろう。1850年代は廃刊数が突出していた年代であり、この時代になんらかの社会状況の変化と混乱があったことを示唆している。

では、1850年代とはどういう時代だったのか? すぐに思い浮かぶのは、1851年に開催されたロンドン万博(世界初の万国博覧会)だろう。英国の社会が、ひとつの新しい時代を迎えたとされている。またロンドン万博の会場「水晶宮(クリスタル・パレス)」の設計者が、1841年に(25)「ガーデナーズ・クロニクル」誌を創刊したパクストンであったことも注目していいだろう。さらにいえば、1804年に創設されたロンドン園芸協会(The Horticultural Society of London)が勅許を受けて王立園芸協会(The Royal Horticultural Society: RHS)となったのは1861年であり、その立役者は1820年代から事務局をあずかってきた植物学者リンドリーだったことも考慮していいだろう。リンドリーはまた、上の(25)「ガーデナーズ・クロニクル」誌の共同編集者でもあった。

表2:園芸雑誌のはじまりと終わり(ゴチックは彩色図版雑誌、イタリックは週刊誌)

年代	創刊	廃刊・誌名変更・統合
1780	(02)	
1790		
1800	(03)	
1810	(04)(05)	
1820	(06)(07)(08)(09)(10)(11)(12)	
1830	(13)(14)(15)(16)(17)(18)(19)(20)(21)(22) (23)	(05)(06)(07)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(17)
1840	(24)(25)(26)(27)(28)(29)(30)(31)(32)(33)	(03)(04)(09)(12)(18)(20)(21)(22)(23) (24)(26)(27)(28)(32)
1850	(34)(35)(36)(37)(38)(39)(40)(41)(42)(43) (44)(45)	(08)(16)(19)(29)(30)(34)(35)(36)(37) (38)(39)(40)(41)(42)
1860	(46)(47)(48)(49)(50)(51)(52)	(16)(31)(33)(43)(46)(47)(50)
1870	(53)(54)(55)	(53)
1880	(56)(57)(58)(59)(60)	(44)(49)(51)(52)(56)(60)(60)
1890	(61)(62)(63)(64)	(57)(61)
1900	(65)	(58)(65)
1910		(48)(64)
以降		(25)(54)(55)(59)(62)

いずれにせよ、この混乱の1850年代に次々に現れては消えていった泡沫雑誌がどのようなものだったのか、すこし具体的に見ておく必要があるだろう。二年以下で廃刊された雑誌は、(34)(35)(36)(37)(39)(40)の六誌である。このうち(36) *The Ladies' Companion* は、ジェーン・ラウドンが出版社から依頼されて編集長となった女性誌<sup>10</sup>であり、別の視点(とくに女性の社会進出という点)から注目に値するが、ここでの議論にとっては考慮外としていいだろう。

他の雑誌のうち、(37) *The Gardeners' Magazine of Botany, Horticulture, Floriculture and Natural Science* と (39) *The Garden Companion and Florists' Guide* は、Elliott (1993) のいう「彩色図版雑誌」である。(40) *Birmingham and Midland Gardeners' Magazine* がどういう雑誌かは不明だが、編集者(C. J. Perry & J. Cole: 付表Bを参照) の経歴から考えて、「彩色図版雑誌」だった可能性は低くない。Elliott (1993) は19世紀の半ばを、この種の雑誌の「大量絶滅」の時代だと指摘していた<sup>11</sup>。表2では「彩色図版雑誌」をゴチック体にし

であり、この種類の雑誌の絶滅が1830年代から50年代にかけて続いたことが裏付けられる。

残る2誌のうち(34) *Country Gentleman*は、ジャーナリストのグレニー(George Glenny: 1793-1874)<sup>12</sup>が園芸関連の編集を担当した週刊誌である。グレニーは、後述するように、当時のフローリスト<sup>13</sup>を代表する人物である。(35) *Gardeners' Hive*もフローリスト向けの雑誌である。フローリストはそれまでの園芸界では日陰の存在だったとっていいし、またグレニー以降の時代にもまた目立たない存在となっていく。グレニーはまた、「園芸ジャーナリスト」と呼ぶべき最初の人物でもある。

グレニーは、1837年に園芸(ガーデニング)関係で初の週刊新聞(22) *Gardener's Gazette*を創刊した。また1830年代に「フラワー・ショー(花卉品評会)」の開催と評価基準をめぐる王立園芸協会(RHS)と悶着を起し、1839年3月9日のRHS評議会での特別問責決議によって協会との関係を一切絶たれたことで知られる。彼が矢継ぎ早に刊行したり編集したりした園芸雑誌は、むしろRHS批判のための武器だったといっても過言ではない。したがって、グレニーが園芸界の混乱の主要な原因だったとはいえないにせよ、混乱の中心にいた一人であったことはまちがいないだろう。

グレニーを例にして短命の泡沫雑誌がこの時代の園芸界の混乱の原因だったということはできないが、短命雑誌が時代の混乱を象徴していることはまちがい。一方、長命な雑誌は園芸界にひとつのトレンドを呼び起こし、ひとつの時代を成立させたということが出来る。表1のなから20年以上の長期にわたって刊行されつづけた長命雑誌16誌を書き抜いて並べ、それぞれの雑誌の特徴を付表Aから加えたのが、表3である。

表3:長命園芸雑誌とその特徴

(詳しくは付表Aの該当箇所を、編集者については付表Bを参照)

番号	発行年	編集者	値段など	特徴・購読層など
(02)	1787	William Curtis	月刊、1s.	彩色図版
(03)	1807	学会誌		彩色図版
(04)	1815	Sydenham Edwards	3s.6d	彩色図版
(08)	1825	Benjamin Maund	月刊、1s.6d.	彩色図版1葉4種
(16)	1833	Joseph Harrison	月刊新聞、6d.	アマチュアを含む 多色刷図版
(19)	1835	Frederick W. Smith	4s.	[彩色図版]
(25)	1841	Joseph Paxton John Lindley	週刊、6d	職業庭師などプロが多数派 広告多数
(44)	1858	Shirley Hibberd	小型、月刊、4d.	アマチュア
(48)	1861	Robert Hogg		
(49)	1861	Thomas Moor Rev. H. H. D' Ombrian		フローリスト 彩色図版多数
(51)	1862	Shirley Hibberd	週刊、2.5d.	
(54)	1871	William Robinson	週刊、4d.	彩色図版[多色刷]
(55)	1879	William Robinson	週刊、1d.	富裕な中流階級
(58)	1884	?	週刊、1d.	職業庭師
(59)	1884	Shirley Hibberd T. Sanders	週刊、1d.	アマチュア家庭園芸 賞金
(62)	1897	Edward Hudson	週刊、6d.	写真グラビア

### (3) 時代と園芸雑誌の変化——値段の研究

この表3から、いくつかのことを指摘することができる(編集者については、次節であらためて検討する)。

1830年代までは、Elliott (1993)が指摘するように、あきらかに「彩色図版雑誌」の時代であった(表2・3のゴチック体も参照)。(16)をあきらかな例外として、他はほとんどが豪華雑誌であり、購読者層は富裕階級に限られていただろう。また(08)は中間型として注目される。一葉の図版ページを四分分割して4種の植物を描くという独特の形式によって、多数の種類を図版をできるだけ安価でという需要に応えた<sup>14</sup>。古本屋で図版を手にとってみたことがあるが、各植物の図が小さく、また絵が比較的単純という欠点はあるが、むしろ可愛らしいと形容したくなるような雰囲気のある上質な図版で



あり、おそらく当時も人気があったものと思われる。

1840年代からは、あきらかに週刊誌の時代に入ったといえるだろう(表1・2のゴチック体も参照)。週刊誌は、彩色図版中心の月刊誌にくらべ、情報量が格段に多くなっていたことはまちがいない。また週刊化による情報流通速度の飛躍的な加速も見逃せない。このことは情報の受け手のうちの多数を、徒弟制度で訓練されるプロの庭師ではなく、雑誌で情報を仕入れ学ぼうとするアマチュアがしめていたことを示唆している。また種苗や園芸道具、肥料や農薬など園芸関連の産業が興隆し、週刊誌を宣伝媒体としていたことがうかがえる(すくなくとも(25)「ガーデナーズ・クロニクル」誌については、何号ものページを開いてみた経験から、まちがいに広告媒体として機能していたと断言できる)<sup>15</sup>。

このような時代の変化は、雑誌の値段にも反映している。ただし、値段の判明していない雑誌のほうが多い。広告で調べるのがいちばんだと思われるのだが、広告を出している雑誌と出していない雑誌がある。また園芸雑誌だけでなく、他の雑誌や新聞の広告欄も調べる必要があるだろう。

現段階で値段がわかっている雑誌について、10年刻みで集計してみたのが表4である。基本的に創刊時の値段を集計したが、他誌の広告などから判明した値段は必ずしも創刊号ではない。また途中で大幅な値段の変化があったとわかっている場合にも、創刊時の値段だけを集計した(ラウドンの(09)「ガーデナーズ・マガジン」とパクストンの(25)「ガーデナーズ・クロニクル」)。週刊の場合には、月刊誌にあわせ、四倍した金額を1か月分として集計した(「ガーデナーズ・クロニクル」を例にとれば、週刊で一冊6ペンスなので、 $6d \times 4 \text{冊} = 24d$ すなわち2シリングとなる)。季刊や隔月刊の雑誌についても同様とした。

表4:雑誌の値段の変遷

年代	2d	3d	4d	6d	8d	10d	1s	1s 4d	1s 6d	2s	2s 6d	3s 6d	4s	5s	合計
1780							(2)								1
1790															0
1800															0
1810												(4)			1
1820							(8)		(8)		(9)			(10)	4
1830				(15) (16) (21)					(20)		(20)		(19)	(18)	7
1840							(33)		(26)	(25)					3
1850		(43)	(44)		(35)				(39)	(34)	(37)				6
1860				(47)		(51)									2
1870			(55)					(54)							2
1880	(60)		(58) (59)		(56)										4
1890	(61)		(64)							(62)					3
合計	2	1	5	4	2	1	3	1	4	3	3	1	1	2	33

この表4から、きわめて大雑把ではあるが、きわめて明瞭なひとつの傾向を見て取ることができる。高価な豪華雑誌から安価な大衆雑誌への全体的な推移である。1830年代にすでに6dの安価雑誌が3種類出ている((15)(16)(21))。図版を1葉に限ったり多色刷にしたりするなど値段を抑える工夫がされ、豪華な彩色図版雑誌の全盛期にも、安価な雑誌の需要があったことを示唆している。この時代の安価雑誌の講読層がどのような人々だったのかは、今後の検討課題としたい。

1シリング以上の雑誌(週刊誌の場合は一ヵ月分4冊で計算)は1830年代から1850年代までが最盛期で、1860年代以降はほとんど創刊されていない。1870年代の一例は、一部4ペンスの週刊誌(54) *The Garden*で、週刊誌で初の彩色図版を目玉のひとつとした。2シリング半(=半クラウン)以上の高級雑誌は1830年代までで、それ以降は創刊されていない。

高級な彩色図版雑誌の衰退と消滅の原因は、Elliott(1993)が指摘するように、異国産植物の導入が拡大して雑誌では追いつけなくなったこと、また手間と資金のかかる手彩色図版が経営的に成立しなくなったことである

う。彩色図版雑誌の嚆矢となった (02) *Curtis's Botanical Magazine* は、1 シリングで3000部という、当時でも破格の値段と部数で出発し、編集者であり発行人だったカーティス自身も「*Flora Londinensis* は名声 (プライズ) を、*Botanical Magazine* はプディングをもたらした」<sup>16</sup> といっていたという。しかし、経営がなんとか成り立っていたのは当初だけで、19世紀半ばには創刊時の10分の1の300部ほどしか売れていなかった<sup>17</sup>。

週刊で彩色図版を目玉とした雑誌は、1870年代にロビンソンが出した2誌に限られる。(54) *The Garden* は、週刊で初の彩色図版が売りであった。両誌ともに、値段と発行頻度から考えて、彩色図版が手彩色だったとは考えられない((55) *Gardening Illustrated* は現物を手に取って見たが、多色刷だった)。1890年代の一冊は「カントリー・ライフ」というグラビア誌である。

ロビンソンの週刊園芸誌は、むしろ洗練された誌面編集に注目すべきだろう。ページ単位でレイアウトや編集がされた、今日にも通じる洒落た雑誌だった<sup>18</sup>。それまでの園芸週刊誌では記事がページの途中で終わって別の記事がつづいたり、記事がページをとばしてつづいたりしていた。この斬新さがロビンソンの雑誌の人気のひとつの要因ともされるが、ようするに雑誌というものの性格や、社会における雑誌の位置づけや役割といったことが、今日につづるものに変化したことが示唆される。

時代と雑誌の性格の変化は、発行形態 (月刊か週刊か) からも見えてくる (表2の右蘭参照。イタリックが週刊)。世紀半ばを過ぎたあたりで月刊誌の時代は終焉し、その直前の1840年代前後から週刊誌の時代がはじまっている。月刊から週刊への変化は、上述のように、情報量の増大だけでなく情報流通の加速も意味している。

情報の需要が高まったということは、園芸 (ガーデニング) 自体の性格も変化したことを示唆している。19世紀のはじめまではガーデナー (庭師、造園業) が確立された職業としてあったが、マーノックの (28) *United Gardeners' and Land Stewards' Journal* について後述するように、世紀半ばには職業ガーデナーは窮地にあった。それ以前の時代のラウドンの多作な著作、編集、出版の活動も、職業ガーデナーの地位確保のための努力だったと

される。またロビンソンが精力を傾けた主眼が、庭園設計のイニシアチブを建築業者から造園業者に取り戻すことにあったことも知られている<sup>19</sup>。

その一方で、ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」様式の特徴は、所有地内の林や溪流などをそのまま利用し多年草を多用するなど、維持管理に手間と費用がかからないことであった<sup>20</sup>——職業ガーデナーとしては、自分で自分の首を絞めるようなものであろう。ロビンソンは65歳となった1903年、豪華な彩色図版雑誌（65）*Flora and Sylva*を創刊した（3年しかもたなかった）。彼の内面には、時代を先取りする進取の精神と過去の庭師の伝統へのこだわりとが、矛盾しつつ同居していたのだらう。

しかし時代は否応なく変化していたと考えられる。ロビンソンの「ワイルド・ガーデン」は、規模は小さくとも土地所有者（いわゆる「中流上層階級（アッパー・ミドル・クラス）」）を対象にした庭園様式であった。しかし、このころにはすでに、土地を所有しないが経済的・時間的に比較的余裕のある、今日に通じる「中産階級」が都市や郊外に形成されつつあったと思われる。そのような階級の需要に応えたのが、おそらくヒバードであったと考えられる（この点については、今後の最重要課題のひとつとしたい）。

園芸雑誌を編集して19世紀の各時代をリードした主要人物として、ラウドン、パクストン、ヒバード、ロビンソンの名前をあげることができるだろう（この4人については次節を参照）。彼らの雑誌の値段を並べてみると、世紀前半のラウドンの（09）*Gardener's Magazine*は刊行形態や値段が変化したのが、月刊に落ち着いた段階では2シリング半であった。世紀半ばのパクストンの（25）*Gardeners' Chronicle*（1841年～）は週刊で6d×4冊＝2シリング。1860年代のヒバードの（44）*The Floral World and Garden Guide*（1858年～）は月刊で4d、（47）*Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet*（1860年～）は週刊で1.5d×4冊＝6d、（51）*Gardener's Magazine*（1862年～）は週刊で2.5d×4冊＝10d、（59）*Amateur Gardening*（1884年～）は週刊で1d×4冊＝4d。1870年代のロビンソンの（54）*The Garden*（1871年～）は週刊で4d×4冊＝1s4d、（55）*Gardening Illustrated*（1879年～）は週刊で1d×4冊＝4d、（61）*Cottage Gardening*（1892年～）は週刊で0.5d×4冊＝2d。

「ガーデナーズ・クロニクル」誌については、リンドリー図書館で各巻の値段を調べて変化を追ってみた。創刊時は上記のように6d×4冊=2シリングで、1855年から5d×4冊=1s8dと若干の値下げがあったが、1874年に新シリーズとなった後もそのまま据え置かれた(ようやく1887年に、3d×4冊=1sに値下げ)。1860年代以降の安価な雑誌が主流となった時代にも割高なまま維持されたことは注目され、それだけ高度な内容が堅持されていたと考えていいだろう<sup>21</sup>。

今日もつづいている週刊科学誌「ネイチャー(Nature)」(マクミラン社)の創刊号は、1869年11月4日号。40ページ(ただし1~8ページと31~40ページは広告で、記事は半分強の22ページ分)で、1部4ペンス(×4=1s4d)である<sup>22</sup>。

「ガーデナーズ・クロニクル」や「ネイチャー」の値段と比較してみれば、ヒバードやロビンソンの雑誌の性格や想定された購読者層について示唆がえられる。ヒバードの(51)*Gardener's Magazine*(2.5d×4冊=10d)と、それに対抗して刊行されたロビンソンの(54)*The Garden*(4d×4冊=1s4d)は、値段から考えて、「クロニクル」や「ネイチャー」と同じように内容が高度で、職業ガーデナーなどプロないしプロ的な読者が想定されていたと推測できる。

一方、二人の他の雑誌は値段が1ヶ月分でも4d前後(2d~6d)であり、よりアマチュア寄りの読者層が想定されていたと考えられる。ロビンソンの(55)*Gardening Illustrated*(1879年~)は、副題が「For Town & Country./ A Weekly Journal for Amateurs and Gardeners.」であり、1881年の6ヶ月間で150万部が売れたとされる。またヒバードの(59)*Amateur Gardening*(1884年~)も、副題に「For Town and Country, For the Home Garden, Villa Farm, Poultry Yard, Bee Shed and Housekeeper's Room」とあり、自分で庭作りする市民を購買層としていた。いずれも都市部の庭いじり愛好家を読者に想定していることはあきらかだろう。

アマチュア向け雑誌の時代になっていくなか、(25)「ガーデナーズ・クロニクル」誌だけが庭師などプロ向けの硬い内容を維持したことは特筆に値するかもしれない。また、19世紀の最後の四半世紀に入って都市市民の家庭園芸にまで園芸の大衆化が進むにあたって、(44)(59)といったヒバード

(Shirley Hibberd)の雑誌が果たした役割は、これまでやや軽視されてきただけに、今後のもっとも重要な課題となるだろう (Wilkinson, 1998 & 2006が出发点となる)。その反面、これまで新たな時代を切り開いたとされてきたウィリアム・ロビンソン(William Robinson)の(54)「ザ・ガーデン」が、土地を所有する「中流上層階級 (アッパー・ミドル)」にこだわったことも見逃すことができない。

#### (4) 編集者の研究——園芸(ガーデニング)界の多数派と少数派

英国19世紀の園芸(ガーデニング)雑誌類のそれぞれの特徴を知るには、記事のひとつひとつ、とりわけ連載や特集を調べていかねばならないだろう。しかし、不用意にその作業をはじめれば、「宝の山」が一瞬にして「迷宮」となることが容易に予想される。

そこで、それぞれの雑誌の編集の中心にいたのはどのような経歴の人物かについて、上記の三編の先行研究のほか、園芸関係の人名辞典、その他の文献を参考にして概略を調べてみた<sup>23</sup>。調査にあたっては、さきに指摘した「園芸(ガーデニング)・ジャーナリズム」の成立と興隆という問題を念頭におくよう意識した。またこの分野のジャーナリズムが成立する以前の時代には、雑誌を編集していたのは植物学者、薬種業者、種苗業者、フローリスト、ガーデナー(造園業者・庭師)であっただろうことも意識した。その結果が付表Bで、人名の配列はアルファベット順とした。

この付表Bは、人名辞典としての用途も意識しているため網羅的な列举となっている。そこで、付表Bから編集者を肩書き別に集計したのが表5である。一人が何種類もの雑誌を編集している場合には、それぞれ別々に集計した。ひとつの雑誌に複数の編集者がいる場合には、重要と思われる人物は全員を別々に集計し、何人かのフローリストが共同編集しているときには一人分として集計した。また編集者の交代がわかっている例では、交代が創刊から比較的早い場合だけを集計した。肩書きが不明ないし曖昧な場合には、集計に加えなかった。肩書きが複数ある場合には、生計の基盤となっていると考えられるものを選んだ(ただしフローリストの場合は、ど

んな時代であれそれだけで生計が維持できていたとは考えられず、本来の職業を別に持っていたはずだが、フローリストとして集計した)。なおグレンニーだけは、フローリストではあるが、ジャーナリストとして集計した。

表5:時代による編集者の変化

年代	植物学者	植物画家	種苗業者	ガーデナー	フローリスト	ジャーナリスト
以前	(02)			(01)		
1810		(04)	(05)			
1820	(10)		(06)(07) (11)	(09)(12)		(08)
1830	(23)	(19)		(14)(15)(16) (17)(18)(21)		(13)(20)(22)
1840	(25)(29)(33)		(31)(32)	(25)(28)	(32)	(24)(26)
1850				(37)(39)	(37)(39)(40) (43)	(34)(36)(42) (44)(45)
1860				(49)(52)	(48)	(47)(51)
1870				(54)(55)		
1880				(56)		(59)
1890				(61)		(62)
合計	6	2	6	19	6	15

この表5から、いくつかの点を指摘することができる。まず植物学者、植物画家、種苗業者が編集の中心にいた時代は1840年代までで終わっている。この事実は、Elliott (1993)が指摘していた「彩色図版雑誌」の「大量絶滅」と一致していると思える。植物学者の例のうち半数はリンドリーであり、また植物画家は2例しかなく、傑出した才能の持ち主が「彩色図版雑誌」をリードしていたといえることができるだろう。また種苗業者が編集していた雑誌は、種苗の宣伝カタログという性格が強かったものと推測される。種苗業が世紀の半ばから衰退した事実はなく、むしろ業績を拡大している傾向がうかがえる。したがって彼らが雑誌の編集や発行から撤退した理由は、宣伝媒体となる雑誌が急増しみずから編集・発行する必要がなくなったこと、また種苗業自身のビジネス・スタイルが変化したことにもとめるべきだろう。

ガーデナー(庭師・造園業者)の園芸雑誌界における活躍は、19世紀のあい

だ変わらなく続いていた。名前をあげると、1820年代はラウドン、1830年代はパクストン、ジョーゼフ・ハリソン (Joseph Harrison: -c. 1855)、ラウドン、ロバート・マーノック (Robert Marnock: 1800-89)、1840年代はパクストン、マーノック、1850年代はトーマス・ムーア (Thomas Moore: 1821-87)、1860年代はムーア、ウィリアム・トムソン (William Thomson: 1814-95)、1870年代から1890年代はロビンソンである。

これらのガーデナーのうち、これまで庭園史や園芸史で注目されてきたのは、『造園百科 (*Encyclopedia of Gardening*)』(1822年)で時代を築いた鬼オラウドン、(25)「ガーデナーズ・クロニクル」を植物学者リンドリーと創刊し、1851年ロンドン万博の会場「クリスタル・パレス (水晶宮)」<sup>24</sup>を設計して大英帝国の威信を世界に知らしめたパクストン、『ワイルド・ガーデン』(1870年)<sup>25</sup>で脚光を浴び、またジークルを見出して今日につづくガーデン様式の成立に貢献したロビンソンの三人だろう。

どちらかといえば無名だった他のガーデナーのうち、ハリソンの名前が最初に登場するのはパクストンの (14) *Horticultural Register* の編集補佐としてであり、三年後に抜けて (15) *Gardeners' and Foresters' Record* と (16) *Floricultural Cabinet and Florist' Magazine* を創刊した。したがって、いわばパクストンの弟分と見ていいだろう。ムーアもまた、経歴をみるとパクストンやリンドリーに近いところにいたようで、パクストン亡き後には (25) 「ガーデナーズ・クロニクル」の編集に名をつらねた。トムソンについては情報不足だが、スコットランドに本拠地を置いていたと思われる。

ロバート・マーノックは当時の風景式庭園デザイナーとして知られ、彼が編集した (28) *United Gardeners' and Land Stewards' Journal* は、苦境にあった職業庭師たちが結集して立ち上げた雑誌である。しかし、結果的にはグレニーの (22) *Gardener's Gazette* を吸収し、グレニーが巻き起こした混乱の収拾に重要な役割をはたした<sup>26</sup>。むしろ彼がリージェント・パークにあった王立植物学協会 (The Royal Botanic Society)<sup>27</sup> の庭園の園長だったことに注目すべきかもしれない。この協会はおそらく、王立園芸協会のもっとも強力なライバルだったと考えられる (ヴィクトリア女王はむしろこちらをひいき



にしていたといわれている)<sup>28</sup>。また、ロビンソンが駆け出しの時代に、この協会の庭園でマーノックの指導を受けたことも看過できないだろう。おそらくこのことが、ロビンソンが名をあげてからの王立園芸協会との微妙な関係<sup>29</sup>に影響していると推測することができるからである。

フローリストが雑誌を編集して刊行したのは、とくに1850年代に目立った現象だったとっていいだろう。とくに(43) *Gossip of the Garden*は、複数のフローリストが共同で編集し、また次々と編集者が変わっていることが注目される。現物は未見だが、おそらく愛好会誌的な側面があっただろうし、刊行資金もフローリストたちの持ち寄りだったのではと推測される。(48) *Journal of Horticulture*を創刊し、それ以前からも雑誌の編集に加わっていたDr Robert Hogg (1818-97)は、フローリストに分類したが、むしろ植物学者とすべき多才な人物だったようだ<sup>30</sup>。グレニーもまたフローリストとして注目すべき人物だが、上述のように、表5ではジャーナリストとして集計した。

編集者をジャーナリストと判断した雑誌は15誌であった。(08) *Botanic Garden*と(20) *The Botanist*の編集者はベンジャミン・マウンド (Benjamin Maund: 1790-1864)で、むしろ出版人というべきかもしれない。前述のように、図版一葉を四分割して4種類の植物の彩色図を載せるという新機軸で人気があった。

表5のジャーナリストの欄でゴチックの立体となっているのは、グレニーの雑誌である。グレニーは、前述のように自分の雑誌(22) *Gardener's Gazette*がマーノックの(28) *United Gardeners' and Land Stewards' Journal*に吸収された1847年には破産状態に陥り、その後は「給料取りの、制限された編集者」の立場に甘んじた<sup>31</sup>。さきに見たように、1850年代にフローリストが編集する雑誌が乱立したことは、グレニーの凋落のためフローリストが自分たちの発言の場をもとめた結果なのかもしれない。グレニーはその後も雇われ編集者や園芸コラムニストとして、1874年に他界するまで活躍した<sup>32</sup>。

表5で斜体となっているのはジェーン・ラウドン (Loudon, Jane (Webb):

1807-58) が編集した雑誌である。(26) *Ladies' Magazine of Gardening* は夫 (ジョン・C・ラウドン) が死の床についたため1年で終わってしまった。(36) *The Ladies' Companion* は、都会の若い主婦向けの雑誌のようで、出版社から依頼されて雇われ編集者になった。今日の都市中産階級の原型が形成された時代だと考えられるので、この雑誌の性格がどのようなものだったのか、また彼女がどのような編集方針を打ち出したかは興味をそそられる<sup>33</sup>。

表5のなかでゴチックのイタリック体になっているのは、ヒバードが編集した雑誌である。本号所収の別稿「ガーデニング雑誌という世界」(1ページ)で述べたように、(25)「ガーデナーズ・クロニクル」(1841年創刊)で時代を築き上げたパクストンが一線を退いた後、ロビンソンが(54) *The Garden* で新たな時代を幕開けさせたとされる1870年代のあいだに挟まる1860年代に、ヒバードがどのような園芸(ガーデニング)スタイルを提唱したか興味深い。彼の視野に都市市民の余暇活動としての趣味の家庭園芸が入っていたことは間違いなく、今後の重要な課題となるだろう<sup>34</sup>。

この節での分析と検討から、次のようにいうことができるだろう。園芸雑誌を編集したり発行したりした人々のうち、植物学者と植物画家は、個人の卓越した才能を生かして雑誌作りに精励し、また読者は彼らの作品に期待して雑誌を購読した。種苗業者は、みずからのビジネスの宣伝媒体としてカタログ的な雑誌を刊行した。ガーデナーが雑誌を編集・刊行することには、雑誌を媒体として言説を形成することによって、造園業に対する需要を高めようとする意図が(意識的にであれ無意識にであれ)あったと思われる。ただしパクストンだけは例外で、職人集団としてのガーデナーだけでなく関連業界を含む園芸界を足場とし、むしろ園芸(ガーデニング)に関連する商品マーケットの発展を意識していた可能性がある。それに対してフローリストたちは、むしろ純粹に趣味を楽しみ、また同好者の輪を広げることがを主要な目的としていただろう。

一方、ガーデニング(園芸)ジャーナリストは、記事を書いたり雑誌を編集したりすることそのものを仕事とする。換言すれば、その時代、その社会の言説の形成自体を目的とするともいえる。たとえば、グレニーが雑誌を編

集し記事を書きまくったのは、自分たちフローリストが冷遇されていることに立腹し、反論を展開し自分たちの立場を社会に認めさせるためであった。ヒバードは「博物学ライター」として自然についての知識や身近で動植物を育むことの重要性を、ガーデニングや水槽飼育を題材として筆をふるった(やがてみずからも庭造りに励むようになったらしい<sup>35</sup>)。この当時のガーデニング(園芸)ジャーナリズムと、今日の欧米や日本のガーデニング(園芸)雑誌との共通点と相違点については、今後の宿題としたい。

## 注

- 1 この調査は恵泉女学園大学園芸文化研究所2006年度研究助成(プロジェクト研究「19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究」(継続)による。ただし、2006年4月から9月までの研修休暇を利用したので、調査予算には恵泉女学園2006年度研修費、および恵泉女学園大学個人研究費も利用した。また、昨年度までのプロジェクト研究などでもリンドリー図書館での予備的な調査がすこしずつ積み重ねられていた。さらには2004-05年度文部省科研費萌芽研究「都市近郊の里山の保全と活用に関する総合的研究」(代表者:新妻昭夫、課題番号:16651015)の継続として、本研究を位置づけることもできる。なお調査のほとんどは、ロンドンにある王立園芸協会(RHS)リンドリー図書館(the Lindley Library)で行なわれた。
- 2 新妻(2004年、2005年、2006年a)。
- 3 「言説」と対になる「表象」については、また別のアプローチを考えなければならない。初期の園芸雑誌の特徴であった豪華な手彩色植物画も、そのひとつの手がかりとなるだろうが、私としては19世紀後半から20世紀初頭にかけて流行した庭を題材にした水彩画の画集(Hobhouse & Wood eds., 1988)に注目したい。渡久地健(2003年)は田中一村の『奄美の杜』を、アップルトン(Appleton, 1975; 1990)の「眺望・隠れ場理論(prospect-refuge theory)」の観点から考察している。上記の水彩画集を同じ手法で分析したなら興味深いだろう。
- 4 電波媒体の登場はラジオ放送の開始まで待たねばならない。世界初のラジオ

放送は1920年、米国のピッツバーグのKDKA放送局。ちなみに日本のJOAKの初放送は1925年3月22日である(テレビ放送は1953年から)。また映画の出現は19世紀末であり、20世紀にはいって本格化する(トーキー技術は1920年代末、カラー映画は1930年代半ば)。

- 5 この「ガーデニング」と「園芸」の語義についての説明は、春山行夫(1980年)の269ページによる。
- 6 「雑誌(Magazine)」と「新聞(Paper)」の区別は、「週刊雑誌」と「週刊新聞」を考えるとどう判断すべきか悩むことになる。中綴じであれ本格製本であれ綴じであれば雑誌、綴じずに折り込んであるだけなら新聞と、簡単には区別できそうもない。後段で述べるよう、当時の英国では「一般ニュース(general news)」を掲載すると「新聞」と見なされ、「新聞税」が課税されていたという。そこで「一般ニュース」を載せずに節税し、値下げが試みられた。であれば「園芸雑誌」あるいは「ガーデニング雑誌」を検討する本論が扱う対象は、自称・他称が「週刊新聞」であったとしても、週刊の「雑誌」として扱って不都合はないだろう。
- 7 英国オープン・ユニヴァーシティの学位論文をもとに書かれた本書は、私の当初の目的の主要な部分をすでにまとめあげている。すなわち、当時のアマチュア・ガーデナーたちに焦点をあて、彼らの活躍を当時の玉石混交の「園芸雑誌」の記事から読み取り、無名のまま歴史の脚注の片隅で眠っていた人々を数多く復活させようとしている。個人的な感情を告白すれば、とても悔しい本ではある——が、自分のねらいが的外れでなかったことを証明してくれている本なのだと思え直すことにした。また、幸か不幸か、掘り下げが深いとはいえ、議論も徹底しているとはいえない(と私は見なしている)。
- 8 拙著『種の起原をもとめて』(1998年)の第2章「勤労青年が博物学者になれた時代」を参照されたい。
- 9 Murray (1863); Fletcher (1969); Elliott (2004)。
- 10 詳細については未調査だが、都市の中流階級の家庭婦人を対象とした婦人雑誌の初期のひとつとして興味深い。参考文献として、Howe (1961)がある。
- 11 本号所収の別稿「ガーデニング雑誌という世界」(1ページ)参照。
- 12 グレニーはこれまでの庭園史や園芸史では等閑視されてきた。悪名ばかりが

- 強調されてきたという意味では、無視されていたといってもいいだろう。ようやくElliot (2004) では、それなりのスペースがあたえられた。Tjaden (1983 & 1986) による発掘と研究の成果だろう。
- 13 本号所収の別稿「ガーデニング雑誌という世界」(11ページ)の注27参照。
  - 14 植物画をはじめ博物画の世界では「原寸大」が鉄則だったようだ。その伝統を破って版面を四分割し図を縮小するという発想は、「コロンブスの卵」だったのかもしれない。
  - 15 これに関連して興味深いのは、種苗の通信販売が19世紀半ばにはじまったらしいという事実である。種苗の通信販売について資料は見つからないが、少なくともサットン商会はこのころに開始した(付表BのSuttonの項目参照)。
  - 16 Desmond (1977)による。
  - 17 上の注16を参照。この雑誌の経営状態の推移が、編集人(J. D. Hooker)と発行人とのやり取りを含め、詳しく紹介されている。
  - 18 Elliott (1993)。
  - 19 庭園設計をめぐる造園家と建築家とのあいだの確執については、新妻(2005年)で紹介したHelmreich (2002)が詳しく議論している。
  - 20 Robinson, W., 1870. *The Wild Garden: or our groves and shrubberies made beautiful by the naturalization of hardy exotic plants. With a chapter on the garden of British Wild Flowers.* John Murray.
  - 21 ダーウィンが愛読し、彼自身もしばしば投稿した。ダーウィンが投稿した記事や論文は、Barrett ed. (1977)に収録されている。
  - 22 国会図書館蔵の創刊号を調べた(新妻、2002年参照)。
  - 23 主要な参考文献は、次の三冊である。Wilkinson (2006)は、これまでほとんど無名だった人々、とくにフローリストやアマチュアを取り上げ、その一部については伝記的な記述のコラムを設けている。Desmond (1994)は、関係する人名を徹底的に拾い上げ、個々の項目の記載量は少ないが、一人ずつに関係する参考文献も網羅している。Hadfield et al. (1980)は定評あるガーデニング辞典で、図版も豊富である。
  - 24 「クリスタル・パレス」については、松村昌家『水晶宮物語』の詳細な研究が参考

になる。

- 25 上の注20参照。
- 26 この雑誌が対グレニーの動きにおいてはたした役割について、Tjaden(1983)が詳しく紹介している。
- 27 王立植物学協会は、1838年に設立されてすぐに勅許をえて王立を名乗っている。ちなみに王立園芸協会は1804年にロンドン園芸協会 (the Horticultural Society of London)として創設され、勅許をえて王立園芸協会と改名されたのは1861年である。王立植物学協会の創設会員で、そのまま30年間も事務局長をつとめたのは、James De Carle Sowerby (1787-1871)。王立植物学協会に関する資料は少ないようだが、Meynell (1980)とSaunders (1969;1981)がある。
- 28 ほかに「the Royal South London Floricultural Society」という協会もあった。王立となったのは1838年であり、それ以前から存在した。この協会についての唯一の資料は、Roberts (1934)。
- 29 たとえば、王立園芸協会のVMH (Victoria Medal of Honor)の受賞をロビンソンは拒否している (Elliott, 2004. p. 330)。
- 30 ホッグについては、短いが興味深い評伝をエリオットが書いている (Elliott, 1992)。
- 31 上の注12のTjaden(1983)。
- 32 今日でも引用される「Golden Rules for Gardeners」など「黄金律」シリーズは、Glenny (1860)に収録されている。
- 33 彼女についての評伝として、Howe (1961)がある。
- 34 別稿「ガーデニング雑誌という世界」(1~13ページ)の注28と29を参照。
- 35 ウィルキンソンのヒバード評伝論文(Wilkinson, 1998)参照。

## 参考文献

- Appleton, J., 1975. *The Experience of Landscape*. John Wiley & Sons.
- Appleton, J., 1990. *The Symbolism of Habitat: An Interpretation of Landscape in the Arts*. Univ. of Washington Press.
- Barrrett, P. H. ed., 1977. *The Collected Papers of Charles Darwin*. Univ. Chicago Press.
- Burchardt, J., 2002. *The Allotment Movement in England, 1793-1873*. Woodbridge: Boydell.
- Davies, J., 2000. *Saying it with Flowers: The Story of the Flower Shop from Victorian Times to the Present Day*. Headline Book Publishing.
- Desmond, R., 1977. Victorian Gardening Magazines. *Garden History* 5 (3): 47-66.
- Desmond, R (with the assistance of Christine Ellwood), 1994. *Dictionary of British and Irish Botanists and Horticulturists, including Plant Collectors, Flower Painters and Garden Designers*. Revised and Completely Updated Edition. Taylor & Francis Ltd and The Natural History Museum (London).
- Duthie, R., 1982. English Florists' Societies and Feasts in the Seventeenth and First Half of the Eighteenth Centuries. *Garden History* Vol.10, No.1 (Spring 1982): 17-35.
- Duthie, R., 1984. Florists' Societies and Feasts after 1750. *Garden History* Vol.12, No. 1 (Spring 1984): 8-38
- Duthie, R., 1988. *Florists's Flowers and Societies*. Shire Publications Ltd (Princes Risborough).
- Elliott, B., 1992. Robert Hogg: Standard Setter. *The Garden(J. of RHS)* vol.9: 427-29.
- Elliott, B., 1993. Gardening Times. *The Garden(J. of RHS)* vol.10: 411-13.
- Elliot, B., 2004. *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004*. Phillimore & Co. (Chichester).
- Fletcher, H., 1969. *The Story of the Royal Horticultural Society: 1804-1968*. Oxford University Press for The Royal Horticultural Society.
- Glenney, G., 1860. *The Handy Book on Gardening and Golden Rules for Gardeners*. Holston and Wright (London).
- Hadfield, M., Harling, R. and L. Highton, 1980. *British Gardeners: A Biographical*

- Dictionary. A. Zwemmer Ltd. In association with The Conde Nast Publications Ltd.
- Hadfield, M. A., 1985. *A History of English Gardening*. Penguin Books.
- Helmreich, A., 2002. *The English Garden and National Identity: The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914*. Cambridge Univ. Press.
- Hobhouse, P. & C. Wood, 1988. *Painted Gardens: English Watercolours 1850-1914*. Pavilion Books Ltd.
- Howe, B., 1961. *Lady with Green Fingers: the Life of Jane Loudon*. Country Life Ltd (London).
- Meynell, Guy, 1980. The Royal Botanic Society's Garden, Regent's Park. *The London Journal*, vol. 6 (no. 2).
- Murray, A., 1863. *The Book of the Royal Horticultural Society*. Bradbury & Evans (London).
- Quest-Ritson, C., 2001. *The English Garden: A Social History*. Viking.
- Roberts, W., 1934. The Royal South London Floricultural Society. *J. RHS*. Vol.59: 236-48.
- Saunders, Ann, 1969 (1981). *Regent's Park: A Study of the Development of the Area from 1086 to the Present Day*. 2<sup>nd</sup> (revised) ed. Bedford College (London).
- Scott-James, A. 1981. *Cottage Garden*. Penguin Books.
- Tjaden, W. T., 1983. 'The Gardeners Gazette' 1837-1847 and Its Rivals. *Garden History*, II(1):70-78.
- Tjaden, W. T., 1986. George Glenny: Horticultural Hornet. *The Garden (JRHS)*, vol. 3: 318-323.
- Wilkinson, A., 2006. *The Victorian Gardener: The Growth of Gardening & the Floral World*. Sutton Publishing (Stroud, Gloucestershire).
- Wilkinson, A., 1998. The Preternatural Gardener: The Life of James Shirley Hibberd (1825-90). *Garden History* 26 (2): 153-75.
- アップルトン (2005年)『風景の経験——景観の美について』(菅野弘久訳、法政大学出版局)。
- 岩本陽児 (2005年)「ナショナル・トラスト創世記」(『ナショナル・トラスト・ジャーナル』no. 20:31-42 ページ)。



- オールティック(1990年)『ロンドンの見世物 I・II・III』(小池滋監訳、国書刊行会)。
- 土屋昌子(2006年)「*Colour Scheme for the Flower Garden* 翻訳勉強会の報告」(『園芸文化』(恵泉女学園大学園芸文化研究所報告)、第3号:86-94ページ)。
- 渡久地健(2003年)「植物景観画としての《奄美の杜》——田中一村絵画の地理学的考察」(『沖縄文化』第38巻2号:75-100)。
- 新妻昭夫(1998年)『種の起原をもとめて』(朝日新聞社;2001年、ちくま学芸文庫)
- 新妻昭夫(2002年)「進化論の時代——ダーウィン=ウォーレス往復書簡 11」(『みすず』、no. 495(2002年6月号):46-63ページ)。
- 新妻昭夫(2004年)「19世紀前半における植物学の近代化と女性の囲い込み:ラウドン夫妻を事例として」(『園芸文化』、第1号:80-85ページ)。
- 新妻昭夫(2005年)「19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究」(『園芸文化』、第2号:113-117ページ)。
- 新妻昭夫(2006年a)「ジークルの庭様式についての予備的な考察(園文研プロジェクト研究:19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究)」(『園芸文化』、第3号:123-137ページ)
- 新妻昭夫(2006年b)「たぐい稀な科学書作家」。『月報』(奥本大三郎訳『フェアブル昆虫記』第二巻・下、集英社)。
- パヴォード、アンナ(2001年)『チューリップ——ヨーロッパを狂わせた花の歴史』(白幡節子訳、大修館書店)。
- 春山行夫(1980年)『花の文化史——花の歴史をつくった人々』(講談社)。
- 蛭川久康(1998年)『トマス・クックの肖像——社会改良と近代ツーリズムの父』(丸善)。
- ブレンドン、ピアーズ(1995年)『トマス・クック物語——近代ツーリズムの創始者』(石井昭夫訳、中央公論社)。
- 松村昌家(1986年)『水晶宮物語——ロンドン万国博覧会 1851』(リプロポート;2000年、ちくま学芸文庫)。
- 松村昌家編(1994年)『“パンチ”素描集——19世紀のロンドン』(岩波文庫)。
- モガー、デボラ(2001年)『チューリップ熱』(立石光子訳、白水社)。

付表 A : 英国 19 世紀の園芸雑誌類一覽(創刊年順)

(表の作成方法についての注記事項は本文を参照されたい)

(01) <i>A General Treatise of Husbandry and Gardening</i> (1721-1724)D				
編集人	発行形態	値段	購買層	備考
Richard Bradley*	(分冊出版)			専門書?
* Prof. Botany at Cambridge				
(02) <i>Curtis's Botanical Magazine (or Flower Garden Displayed)</i> (1787-present)DEN				
William Curtis	月刊**	1s.		手彩色図版各号3葉
* 変遷と経営状況についてDesmond (1977) に詳しい。手彩色図版が主体で文章はその解説のみ→その後の類似の雑誌の雛形となる。**実質的には「分冊出版物(part-work)」(Wilkinson, p.34)。				
(03) <i>Transaction of the Horticultural Society of London</i> (1807-1848)DEN				
学会誌	四折版 〔月刊〕			豪華雑誌*
*図も印刷も豪華(印刷は当時最高のW. Bulmer。豪華すぎて実践家向きでないという批判( <i>Gardener's Magazine</i> in 1828)。財政的にも負担。絵師:William Hooker, Mrs Whithers et al.				
(04) <i>Botanical Register</i> (1815-1847)DEN →1839 <i>British Flower Garden of Robert Sweet</i> と合併。				
Sydenham Edwards* & J. B. Ker**	〔月刊〕	3s.6d.***		彩色図版は各号平均7葉で、解説は2頁
*カーティスを離脱した画家、**別名:Mr. Gawler。***クロニクル誌創刊号の広告欄による。****絵師はMiss Drake。1829年からはリンドリーが編集。:1830年代にすくなくとも同様の雑誌が15誌も出て、同じ時期にそのうち12誌が廃刊(D、51ページ)。				
(05) <i>Botanical Cabinet</i> (1817-1833)DEN				
Loddiges, Cartis and George親子	〔月刊〕			絵: George Loddiges
*説明は不正確で宗教的。種苗商であり、宣伝カタログとっていいかも。				
(06) <i>Geraniaceae</i> (1820-1830)D				
Robert Sweet*	〔月刊〕	?		図: E. Dalton Smith
*種苗商。				
(07) <i>British Flower Garden</i> (1823-1838)D →1839 <i>Botanical Register</i> と合併。				
Robert Sweet	〔月刊〕			図版: E. Dalton Smith
*図のできがひどいとLindleyに酷評される。16年で7巻なので、分冊刊行物なのだろう。				

(08) <i>Botanic Garden</i> (1825-1851) DN				
B e n j a m i n Maund* 絵師は E. Dalton Smith	月刊	大型版は 1s.6d 小型版は 1s.0d**		彩色図版中心 図 版1葉に植物4種
*publisher, printer, bookseller and chemist at Bromsgrove in Worcestershire. ** <i>The Botanist</i> vol.5に掲載の広告による。				
(09) <i>Gardener's Magazine</i> ('and Register of Rural and Domestic Improvement') (1826-43) DWN				
John C. Loudon Pub. by Orr & Co	季刊・本版型 隔月刊 月刊	5s. 3 s.6 d. 2 s.6 d.*	職業庭師 (とくに 庭師頭と雇用主)	線画が少しだけ
*reduced to 1 shilling and 6 pence in 1834. 創刊号4000部数日で完売。毎年、750ポンドの収入。* 植物学者向けではなく庭師向けを目的とした初の雑誌。				
(10) <i>Pomological Magazine</i> (1827-1830) DN				
John Lindley Pab. Henry G. Bhon	月刊	5s.		彩色図各4葉、 Mrs. Withers
(11) <i>Florist's Guide</i> (1827-1832) D				
Robert Smith	[月刊]			E. D. Smith
*6年で2巻なので、分冊刊行物なのだろう。				
(12) <i>Magazine of Natural History</i> (1828-1836) N →1836, Mr. Charlesworthに売却 →1841, Richard Taylorの <i>Annals of Natural History</i> と合併して <i>Annals and Magazine of Natural History</i> *				
J. C. Loudon	月刊			
拙著『種の起原をもとめて』の第2章参照。				
(13) <i>Horticultural Journal and Florists' Register</i> ('of Useful Information Connected with Floriculture') (1833-39) DEW ← <i>Royal Lady's Magazine</i> (1831-33)				
George Glenney	[月刊]		フローリスト (職 人階級) と観客?	
*1854 <i>Horticultural Journal</i> 復刊、 そしてGlenney's Quarterly Review of Horticultureに統合される。				
(14) <i>Horticultural Register (and General Magazine)</i> (1831-36) DWN				
J. Paxton & Joseph Harrison* J a m e s M a i n (1835-)	月刊、各号 48頁		活字小さく安価 に抑えた	アマチュア愛好 家 (職人や小売商 人) 図は白黒で少 ない。木口木版か
*1833年に抜けて、 <i>Floricultural Cabinet</i> を創刊する。A gardener to Lord Wharnccliffe at Wortley Hall in Yorkshire. Paxton was, then, head gardener to the Duke of Devonshire at Chatsworth.彼は少なくとも五種類の園芸雑誌を編集(D,57ページ)。				

(15) <i>Gardeners' and Foresters' Record</i> (1833-36) DWN				
創刊は Joseph Harrison	月刊、24頁	6d.	?	彩色図1葉
(16) <i>Floricultural Cabinet and Florist' Magazine</i> (1833-59) DEWN →1860 <i>Gardener's Weekly Magazine</i> (1ペニー半) →1862 <i>Gardener's Magazine</i>				
Joseph Harrison →his sons (1855, JH dead) Pub. by Whittaker & G. Ridge	月刊新聞 小型本版型 24頁	6d.	Floriculturist 職業庭師と アマチュア	多色刷図版。 最初は2葉、 後は1葉
* 公称:1833年9ヵ月間で5万部。1840年各号1万部ともいう (D, 57ページ)。 1861年にHibberd編集になり、1865年に版型を大きくし売れ出す。				
(17) <i>Architectural Magazine</i> (1834-1838)				
J. C. Loudon	[月刊]			
*追加調査 →Gloag, J., 1970. <i>Mr. Loudon's England: The Life and Work of John Cladius Loudon and His Influence on Architecture and Furniture Design</i> . Oriel Press, New Castle upon Tyne.				
(18) <i>Paxton's Magazine of Botany and Register of Flowering Plants</i> (1834-1849) DEN				
Joseph Paxton* -1835	月刊	5s.	富裕階層	各号4葉、手彩色、実物大
*1835年に辞職。他のことが多忙のため、 <i>Horticultural Register</i> も1836年に廃刊。				
(19) <i>Florist's Magazine</i> ('a Register of the Newest and Most Beautiful Varieties of Florists' Flowers') (1835-56) W				
Frederick W. Smith	[月刊]	4s.	?	[彩色図版]
(20) <i>The Botanist</i> (1836-1841) DE				
Benjamin Maund Botanic Garden の成功に気をよ くして創刊	[月刊] 四折版 八折版	2s.6d 1s.6d.		各号に手彩色図 版4葉 steel engraving
(21) <i>Floricultural Magazine and Miscellany for Gardeners</i> (1836-42) WE				
Robert Marnock	[月刊]	6d.	?	
(22) <i>Gardener's Gazette</i> (1837-44) DWE → <i>Amateur and Working Gardeners' Gazette</i> (1844-45) → <i>Amateur Gardeners' Gazette</i> (1845-46) → <i>Gardeners' Gazette Edition of United Gardeners' and Land Stewards' Journal</i> (1845-47) → <i>Glenny's Gardener's Gazette</i> (1859-63) → <i>Glenny's Gazette and Midland Florist</i> (1863-64) → <i>Gardeners' and Farmers' Journal</i> (1867-80).				
G. Glenny (1837-40)*	週刊新聞			初の園芸週刊
* →J. C. Loudon (1840-41) →James Main (1841) →G. Glenny (1842-43)				

<b>(23) <i>Floral Cabinet and Magazine of Exotic Botany</i> (1837-1840) DE</b>				
G. B. Knowles & F. Westcott*	[月刊]	?		彩色図版中心 (発刊主旨)
*二人とも植物学者。				
<b>(24) <i>Florist's Journal</i> (1840-45) WE</b> → <i>Florist's Journal and Gardener's Record</i> (1846-48) ← (13) <i>Horticultural Journal</i> (1831-39) の後継誌				
George Glenny Pub. Groombridge & Son	月刊	?	フローリスト	彩色図版1葉
<b>(25) <i>Gardeners' Chronicle (and Agricultural Gazette)</i> (1841-1969) DEWN</b> → 1969 <i>Horticultural Trade Journal</i> に併合				
Joseph Paxton John Lindley (植物学の部分)	週刊 16頁	6d.	紳士階級、上流階級、職業庭師、種苗業者	グレニーとラウンへの対抗
* <i>Agricultural Gazette</i> が含まれていたのは1844-73。発行人: Charles Wentworth Dike and William Bradbury ( <i>Punch, The Daily News and The Field</i> の発行人)。発行部数は6500部。1860年代に多色刷石版を試みるが、すぐ放棄。				
<b>(26) <i>Ladies' Magazine of Gardening</i> (1842) DWN</b>				
Jane Loudon	月刊*、30頁	18d.	女性**	巻頭彩色図版
*11号で休刊。**「花が好きだけど、庭師でも職業フローリストでもない」(廃刊挨拶)。				
<b>(27) <i>Gardener and Practical Florist</i> (1843-44) W</b>				
Pub. by Groombridge & Sons	?	?	?	Glennyは書き手の一人
<b>(28) <i>United Gardeners' and Land Stewards' Journal</i> (1845-47) W</b> → 1847 <i>Gardener's Gazette</i> を乗っ取り、 <i>Gardeners' and Farmers' Journal</i> に。				
Robert Marnock*	[週刊]	?		
*編集補佐(花卉関係): John Dickson。* Glenny's <i>Gardener's Gazette</i> の対抗誌として創刊される。				
<b>(29) <i>Journal of the Horticultural Society</i> (1846-1855) DN</b>				
John Lindley	月刊		*	
*Transactionよりは安価なはず。				
<b>(30) <i>Gardeners' and Farmers' Journal</i> (1847-53) W</b> ← <i>United Gardeners' and Land Steward's Journal</i> の後継誌。 → <i>Mark Lane Express and Agricultural Journal</i> (1854-80) に統合される。 No information other than above				
<b>(31) <i>Midland Florist (and Suburban Horticulturalist)</i> (1847-63) W</b> → <i>Glenny's Gazette and Midland Florist</i> (1863-64)				
John Fredrick Wood* → 1857 Alfred G. Sutton	月刊、46頁 極小型版	誰でも買える値段	フローリスト	
* Nottinghamの種苗業者。フローリストたちが結集して雑誌を創刊した。Suttonも種苗屋の二代目。				

(32) <i>Florist</i> (1848) DEW → <i>Florist and Garden Miscellany</i> (1849-50) → <i>Florist, Fruitist and Garden Miscellany</i> (1851-61) → <i>Florist and Pomologist</i> (1862-84)				
Beck→Turner→ Hogg*	月刊新聞 32頁、小型 本版型	?*	フローリスト	彩色図版1葉 初年度900部
*初代編集長はEdward Beck(種苗屋、ゼラニウムのフローリスト)、有力な仲間を結集。1851年にCharles Turnerが乗っ取り、John Spencerが補佐。1853年にRobert Hogg(エジンバラ大学出の種苗屋でフローリスト)が編集長となり、その後、所有権も。1862年にSpencerが共同編集者となり、それをThomas Moore (and possibly William Paul) が引き継ぐ。1875年以降はMooreが単独編集。最初の立ち上げは、以下の6人:Edward Beck, Henry Groom, John Edwards, Charles Fox, Charles Turner and Thomas Rivers.**「クロニクル」誌1871年12月30日号の広告欄によれば、 <i>The Florist and Pomologist, A Popular Monthly magazine of General Horticulture</i> の値段は1シリング。				
(33) <i>Cottage Gardener (and Country Gentleman's companion)</i> ** (1848-61) DEWN → <i>Journal of Horticulture</i> (1861-1915)。それ以前に、 <i>Poultry Chronicle and Beekeeper's Chronicle (Poultry, Bee and Household Chronicle)</i> を統合。Hoggは1861年に発行会社を設立し、後には <i>Florist</i> を乗っ取る。				
George W. Johnson 1858年、R. Hogg が参加 1861年に発行権 を買収	週刊 新聞版型	3d.*	適度な収入のあ る「アマチュア」	耐寒性植物と野 菜栽培を奨励
* ニュース欄なく新聞税なし。* * 副題「Amateur and Cottager's Guide to Outdoor Gardening and Spade Cultivation」。1860年代に多色刷石版を試みるが、すぐ放棄。				
(34) <i>Country Gentleman</i> ('a Cottage, Villa, Farm and Garden Newspaper') (1850) W				
G. Glenny(園芸 担当)	[週刊]	6d.		
(35) <i>Gardeners' Hive</i> (1850) W				
J. T. Neville	週刊	2d.	フローリスト アマチュア	
(36) <i>The Ladies' Companion</i> (1850-1851) D				
Jane Loudon	[月刊]			
*追加調査→Howe, B., 1961. <i>Lady with Green Fingers: the Life of Jane Loudon</i> . Country Life Ltd. (London).				
(37) <i>The Gardeners' Magazine of Botany, Horticulture, Floriculture and Natural Science</i> (1850-1851) D				
Thomas Moor & W. P. Ayres. Pub. William Orr	月刊	2s.6d		職業庭師手彩色 石版図は豪華。 木口木版も多数
*Paxton's Magazine of Botany廃刊の跡を継ぐ目的。職業庭師には高すぎた。				

(38) <i>Paxton's Flower Garden</i> (1850-53) DEN 他に書誌情報なし、改訂版の序コピーあり				
(39) <i>The Garden Companion and Florists' Guide</i> (1852) D				
T. Moor & W. P. Ayres	月刊	1s.6d.		豪華図版
* 発行人: William Orr、資金協力: Arthur Henfrey。10ヶ月で廃刊。				
(40) <i>Birmingham and Midland Gardeners' Magazine</i> (1852-53) W				
C. J. Perry & J. Cole*	[月刊]	?		北部の庭師**
* 二人とも職業庭師。** 南の雑誌の勧める植物は北では育たない				
(41) <i>Gardener's Record and Amateur Florist's Companion</i> (1852-54) W				
J. T. Neville	[月刊]	?		
(42) <i>Glenny's Quarterly Review of Horticulture, Literature, the Arts and General Science</i> (1853-55) W → <i>Horticultural Journal</i> に統合される。				
George Glenny	名前から季刊と推定。他の情報なし			
(43) <i>Gossip of the Garden</i> (1856-63) W				
E. S. Dodwell & John Edward →William Dean, John Sladden & A.S.H*	月刊、36頁 小型版	3d.	Florist 郊外園芸家 Floristより アマチュア向け	発行部数1000部 だが、5000人の予約必要
* 最初の編集二人はフローリスト。				
(44) <i>The Floral World and Garden Guide</i> (1858-80) DWN				
Shirley Hibberd ~1876 Pub. by Groombridge & Son	月刊新聞 小型版 24頁	4d.	「そこそこの収入(資産)」の「アマチュア」	木版図版、創刊号だけ多色刷木版*
*the Yorkshire firm of Benjamin Fawcett(多色木版では右に出るものなし)。				
(45) <i>Garden Oracle ('and Economic Year Book')</i> (1859-1900---) W				
Shirley Hibberd	年刊			Floral Worldと連携
(46) <i>Florist's Guide</i> (→ <i>Gardeners' Magazine of Botany</i> ) (1860) E: 図から判断すると1860年創刊で、1年しかもたなかった。				
?	[月刊]		?	図版中心
(47) <i>Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet</i> (1860-62) DW ← <i>Floricultural Cabinet</i> の後継誌。 → <i>Gardener's Magazine</i> (1862-82)。				
J. J. & E. Harrison →Hibberd(1861-)	週刊 小型 新聞版型	1.5d.		
(48) <i>Journal of Horticulture</i> (1861-1915) →参照32: <i>Cottage Gardener</i> (1848-61)				

R. Hogg	[週刊]			
(49) <i>Floral Magazine</i> (1861-81) DWN				
Started by Lovel Reeve Ed. by Thomas Moor→Rev. H. H. D'Ombrian	月刊	?	フローリスト向 けだが植物学的 過ぎた	彩色図版多数、絵 師はフィッチ**
*副題「comprising Figures and Descriptions of Popular Garden Flowers」。 **編集者交代とともに、James Andrews of Walworthに。				
(50) <i>English Flower Garden</i> (1862) E: 図から判断すると1862年の創刊で、1年だけ。				
?	[月刊]	?		図版中心
(51) <i>Gardener's Magazine</i> (1862-82) DWE → <i>Gardeners' Magazine</i> (1882-1916) ← <i>Gardener's Weekly Magazine</i> (1860-61) の後継誌 ← <i>Floricultural Cabinet and Florist's Magazine</i> (1833-59)				
Shirley Hibberd →George Gordon (1890-)	週刊*	2.5d.		
*1865年に発行元がCollingridgesになり、版を大きくしてから売れ出し、1860年 代のベストセラー雑誌となる。				
(52) <i>Gardener</i> (' <i>a Magazine of Horticulture and Floriculture</i> ') (1867-82) W →1899 <i>Popular Gardening</i> として復刊				
William Thomson →David Thomson	月刊新聞 48頁		アマ、プロ、 フローリスト	最初はエディン バラで刊行
* 寄稿者の一人はRev. Samuel Reynolds Hole (1819-1904)。				
(53) <i>Villa Gardener</i> (1870-75) W				
1874年からD. T. Fish	月刊新聞 48頁		ロンドン郊外の 庭師	
(54) <i>The Garden</i> (' <i>An Illustrated Weekly Journal of Gardening in All Its Branches</i> ') (1871-1927) DEWN				
William Robinson	週刊新聞 22頁	4d.		週刊で初の彩色 図版
* ヒバードの <i>Gardener's Magazine</i> に対抗して発刊。1900年、カントリー・ライフ 社のEdward Hudsonが乗っ取り、やがて <i>Homes and Gardens</i> に吸収される。				
(55) <i>Gardening Illustrated</i> (1879-1956) DEWN → <i>Gardeners' Chronicle</i> に吸収される。				
William Robinson	週刊新聞 各号16頁	1d.	富裕な中流階級 小庭、窓庭まで	[彩色図版]
* 1881年の6ヵ月間で150万部が売れたとされる。副題「For Town & Country./ A Weekly Journal for Amateurs and Gardeners.」。				
(56) <i>Woods and Forests</i> (1883-85) W → <i>Garden</i> に吸収される。				
William Robinson	[週刊]	2d.	森林関係者	



(57) <i>Garden-Work for Villa, Suburban, Town and Cottage Gardens</i> (1884-96) W No information				
(58) <i>Gardening World (Illustrated)</i> (1884-1909) W → <i>Garden Work</i> (started in 1901)に統合される。				
?	週刊、14頁	1d.	職業造園業者	
(59) <i>Amateur Gardening</i> *(1884～現在) DWEN				
1884-188? S. Hibberd 1887-1890 T. Sanders	週刊、二段 組、10頁	1d.	アマチュア、自力 で庭作り	賞金
* 副題「For Town and Country, For the Home Garden, Villa Farm, Poultry Yard, Bee Shed and Housekeeper's Room」。発行はCollingridges( <i>Gardeners' Magazine</i> の発行元)。				
(60) <i>Garden and Horticultural Sales and Wants Advertiser</i> (1888) W → <i>Garden and Horticultural Gazette</i> (1889) → <i>Northern Gardener</i> (1889-92) → <i>British Gardening for Amateurs and Professionals</i> (1892-93)				
	隔週刊 →週刊	1d.		マンチェスター。 賞金
(61) <i>Cottage Gardening</i> (1892-98) W →1899年: <i>Gardener</i> に統合				
W. Robinson	週刊	0.5d.		
(62) <i>Country Life (Illustrated)</i> (1897-present) W				
Edward Hudson	週刊	6d.		写真多数
(63) <i>Popular Gardening</i> (1899---)→参照51: <i>Gardener</i> (1867-82) W				
(64) <i>The Gardener</i> (1899-1919) WE ← <i>Cottage Gardening</i> を乗っ取って創刊される。 →1919 <i>Popular Gardening</i> を吸収する。				
	週刊	1d.		
(65) <i>Flora and Sylva</i> (1903-05)E				
Robinson	月刊 平均40頁			紙も印刷も図も 最高水準*
*絵師はH. G. Moor。				

## 付表 B：園芸雑誌の編集者たち (アルファベット順)

[FRS: Fellow of Royal Society; FLS: Fellow of Linnean Society]

**Ayres, William Port** (1815-75): (37) *The Gardeners' Magazine of Botany, Horticulture, Floriculture and Natural Science* (1850-1851) with Thomas Moor. (39) *The Garden Companion and Florists' Guide* (1852) with Thomas Moor.

種苗業 (Blackheath)。専門はペラルゴニウム (ゼラニウム)。

**Beck, Edward** (c. 1804-61): (32) *Florist* (1848-50).

フローリスト (ペラルゴニウム)、種苗業。クエーカー教徒。ミドルセックス州 Isleworth の Worton Cottage で暮らしていた。商船の船員だったが、後にスレートの販売業を営む。園芸協会の品評会での賞金を、後続のための資金として協会に寄付した高潔な人柄で知られる。フローリスト誌を1848年に立ち上げた創刊発起人はベックのほか、以下の5人: Henry Groom (fl. 1820s-50s) はロンドンの種苗業者、フローリスト。John Edwards (-1862) はフローリストで、National Floricultural Society の創設メンバー。Charles Fox (1794-1849) は花卉画家で版画家。Charles Turner (次を見よ)。そして Thomas Rivers (1798-1877) はハートフォードシャー州 Sawbridgeworth の種苗業者で、バラと果樹を専門とした。

**Bradley, Richard** (c. 1688-1732): (01) *A General Treatise of Husbandry and Gardening* (1721-1724).

職業ガーデナー、植物学者、著作家。ケンブリッジ大学植物学教授 (1724-32)。出身など履歴の多くは不明。1712年にFRSに選出されたが、5年後に薬草園と温室および資金の運用上の問題で除名。多作な著作活動からガーデン・ジャーナリストの先駆者とされる。(1)は雑誌ではなく、分冊刊行物と見なすべきだろう。

**Cole, J.** (????-????): (40) *Birmingham and Midland Gardeners' Magazine* (1852-53) with C. J. Perry.

北部の職業ガーデナー。

**Curtis, William** (1746-99): (02) *Curtis's Botanical Magazine (or Flower Garden Displayed)* (1787-present). 編集兼発行人。

植物学者、出版人。FLS. ハンプシャー州アルトン (Alton) で生まれる。父親はクエーカー教徒で、大手の皮なめし業者。薬種師の見習いからはじめて、雇用主の

薬種商を引き継ぐが、1770年ごろから植物学に専念する。チェルシー薬草園の実習助手をしながら、『*Flora Londinensis*』刊行し名声を得る。しかし資金繰りに苦勞し、受講者の好みに呼応して『*Botanical Magazine*』を1787年から刊行することになった。昆虫学者でもあり、honey dewがアリマキの排出物であることをあきらかにしたとされる。

**Dean, William** (1825-95): (43) *Gossip of the Garden* (1856-63) を引き継ぐ (with John Sladden & A.S.H.)。

種苗業、フローリスト(パンジーとヴィオラ)、種子商。ハンプシャー州サウサンプトン生まれ。*Florists' Guide*も編集した。

**Dickson, John** (1811-1881): (28) *United Gardeners' and Land Stewards' Journal* (1845-47) の編集補佐(花卉関係)、中心はマーノック。

**Dodwell, Epharaim Syms** (1819-1893): (43) *Gossip of the Garden* (1856-63) with John Edward.

フローリスト(ナデシコ類)、葉巻商。バッキンガムシャー州Long Crendon生まれ。Oxford Carnation and Picotee Union事務局長。

**D'Ombrian, Revd Henry Honeywood** (1818-1905): (49) *Floral Magazine* (1861-81) を引き継ぐ(Thomas Moorから)。

フローリスト、聖職者。ロンドンのピミリコ (Pimilico) 地区生まれ。ダブリン(アイルランド)のトリニティ・カレッジで研究の後、ケント州ディール(Deal)の教区牧師となり、アウリキュラとグラジオラスの栽培をはじめ。その後、同じ州内のWestwellの教区牧師。National Rose Societyの創設会員で事務局長。RHSのVictoria Medal of Honour受賞(1897年)。

**Edwards, John** (-1862): (43) *Gossip of the Garden* (1856-63) with E. S. Dodwell.

フローリスト。(32) *Florist*の創刊にも協力。National Floricultural Society創設会員。1853年に*National Garden Almanac*を創刊。都市ガーデニングの草分けとして知られる。

**Edwards, Sydenham Teast** (1768-1819): (04) *Botanical Register* (1815-1847)。

植物画家。FLS。ウェールズのモンマスシャー州Abergavennyで、教師の息子として生まれる。リンネ協会会員(1805年~)。10代のときカーティスに才能を見出

され、1788年から「ボタニカル・マガジン」に1200点以上の絵を描く。1815年にカーティスの後継者（ウィリアム・カーティスの従兄弟のSamuel Curtis: 1779-1860）と袂を分ち、(04)を創刊し、J. B. Kerと共同編集。

**Fish, David Taylor** (1824-1901): (53) *Villa Gardener* (1870-75). ただし、1874年から。職業ガーデナー、園芸ジャーナリスト。スコットランドのパーズシャー州Old Scone生まれ。果樹や球根栽培の著作がある。

**Glenny, George** (c. 1793-1874): (13) *Horticultural Journal and Florists' Register* (1833-39). (22) *Gardener's Gazette* (1837-44). (24) *Florist's Journal* (1840-45). (34) *Country Gentleman* (1850). (42) *Glenny's Quarterly Review of Horticulture, Literature, the Arts and General Science* (1853-55).

ジャーナリスト、編集者、フローリスト (Grower & Exhibitor)、保険会社事務局長。ロンドンで生まれ育ち、10代でアウリキュラとヒヤシンスのフローリストとして才能を発揮し、その後、時計職人などで生計を立てる。30歳代半ばからフローリストとしての活動を再開し、1832年にはロンドンの主要な種苗業者とアマチュアを組織してメトロポリタン・フローリスト協会 (the Metropolitan Society of Florists and Amateurs) を結成する。みずからが出品する花の評価が高かっただけでなく、品評会の組織運営や評価基準の客観化などが高く評価された。ただしジャーナリストとしての筆舌が激しすぎ、ロンドン園芸協会での自分の出品への評価をめぐる協会の評議会と対立し、1839年3月9日に特別問責決議がなされた。グレニーの雑誌創刊や編集活動は、この園芸協会(とりわけリンドリーとパクストン)との対決およびフローリストの代表としてのキャンペーンの側面が強い。しかし、1840年代後半には他の勢力(マーノックおよび王立ロンドン植物学協会 the Royal Botanic Society of London) との対立・競合も激化し、退却をよぎなくされる。その後は「給料取りの、制限された編集者」をつづけるが、新聞に園芸コラムをその死まで連載する。彼のGolden Rules for Gardenersはいまでも引用される。数例を引けば、「どの植物でも悪い品種は、かりにそれを助けてあげることができたにしても、けして育ててはいけぬ。すぐれた品種と同じスペースをとり、同じ世話を要求するからだ。／名前のついた品種のコレクションを買ってははいけぬ。ひとつの有用なもののために、49の無用なものを買ってしまう。

いちばんいいものを見つけ、それだけを購入せよ。／もっとも謙虚な職業庭師が、しばしば、もっとも人気のある著者より多くのことを教えてくれる。彼らがやっていることの説明には、どんなことにでもつねに忍耐をもって耳を傾けよ」。

**Gordon, George** (1841-1914): (51) *Gardener's Magazine* (1862-82) をヒバードから引き継ぐ(1890-1913年)。

フローリスト。ハートフォードシャー州Frogmore Hall生まれ。RHSのVictoria Medal of Honour受賞(1897年)。National Sweet Pea Society会長(1903年)。National Dahlia Society会長(1913年)。

**Harrison, E.** (????-????): (47) *Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet* (1860-62) を引き継ぐ(父親から?)。

??????????

**Harrison, J. J.** (????-????): (47) *Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet* (1860-62)。

??????????

**Harrison, Joseph** (-c. 1855): (14) *Horticultural Register* (1831-36). (15) *Gardeners' and Foresters' Record* (1833-36). (16) *Floricultural Cabinet and Florist's Magazine* (1833-59)。

職業ガーデナー(gardener to Lord Wharnccliffe at Wortley Hall in Yorkshir)。種苗業者(1834-48)。1860年に、息子たちが(16)を一ペンス半の小型新聞(46) *Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet* とする。

**Hibberd, James Shirley** (1825-90): (44) *The Floral World and Garden Guide* (1858-80). (45) *Garden Oracle* ('and Economic Year Book') (1859-1900---). (47) *Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet* (1860-62). (51) *Gardener's Magazine* (1862-82). (59) *Amateur Gardening* (1884~現在)。

ジャーナリスト(科学、博物学)、園芸学者。ロンドンのステップニー(Stepny: 当時は郊外の村だったが、現在はロンドン東部タワーハムレット地区の一画)で生まれる。実家は船員一家。本の販売と製本の仕事をした後、ジャーナリストに転向する。結婚を期に、都会や郊外での小規模な庭作りの研究をはじめ。著書に「*The Town Garden*」(1855)、「*Rustic Adornment for Homes of Taste*」(1856)など。

鉢植えのヒイラギとツタのコレクションでも知られる。健康が悪化してからは、チズウィックにあったRHS庭園の復活と国際会議の組織に専念し、突然の死は過労のためといわれる。

**Hogg, Dr Robert** (1818-97): (32) *Florist* (1848)の後身雑誌を1853年から編集、後には乗っ取る。(33) *Cottage Gardener* (1848-61)の編集に1858年に参加し、1861年には発行会社を設立して→(48) *Journal of Horticulture* (1861-1915)。

植物学者、果樹学者、種苗業者、フローリスト。FLS. 法学博士(LLD)。スコットランドのベリクシア州Dunsで生まれる。父親は指導的な種苗業者。医学を志してエジンバラ大学に入学するが植物学に転向し、卒業後も著名な果樹学者Dr Hugh Ronalds (c. 1759-1833)のもとで研究をつづけ、最後の仕上げはフランスのルーアンとパリ植物園で行う。1845年に種苗業に乗り出すが失敗し、果樹などの研究に専念する。1854年にパクストンとともに英国果樹学協会British Pomological Societyを設立(1858年に園芸協会果実委員会と合併)。果樹学の名著*Fruit Manual*などを書くほか、園芸協会の機関誌を編集する。1875年には王立園芸協会の事務局長に選任される。

**Hudson, Edward** (1854-1936): (62) *Country Life (Illustrated)* (1897-present).

編集者、出版人……………??????NBD?Supplementを調べる??

**Johnson, George William** (1802-86): (33) *Cottage Gardener* (1848-61).

ジャーナリスト、法廷弁護士、カルカッタ大学教授(Moral and Political Economy: 1836-42)。FLS. ケント州ブラックヒースBlackheath生まれ。アマチュア向け園芸雑誌を発行した初期の一人であり、彼の雑誌は(24)「クロニクル」の植物学と異国産植物偏重を批判し、「スコップ栽培 (spade cultivation)」を奨励した。著書に*History of English Gardening* (1829); *Cottage Gardener's Dictionary* (1857)など多数。

**Ker, John Bellenden** (1764-1842): (04) *Botanical Register* (1815-1847).

編集者。別名Mr. Gawler(ユダヤ系移民)。ハンプシャー州アンドヴァーのRamridge生まれ。(04)をS. T. Edwardsと共同編集。

**Knowles, George Beauchamp** (fl. 1800s-1850s): (23) *Floral Cabinet and Magazine of Exotic Botany* (1837-1840).

植物学者、外科医。バーミンガム医学校植物学教授(1829-52)。FLS. ロンドン植物学会(Botanical Society of London)会員。(22)をF. Westcottと共同編集。

**Lindley, John** (1799-1865): (10) *Pomological Magazine* (1827-1830). (25) *Gardeners' Chronicle (and Agricultural Gazette)* (1841-1969). (29) *Journal of the Horticultural Society* (1846-1855).

植物学者。ロンドン大学初代植物学教授。FRS. FLS. ノーフォーク州Catton生まれ。父親は種苗業者。植物採集人を目指したが、バンクス (Sir Joseph Banks: 1743-1820)に見出されて私設図書室の助手となる。1822年、23歳でロンドン園芸協会(後の王立園芸協会)協会のチズウィック・ガーデン (Chiswick Garden) の副事務局長に任命され(年棒120ポンド)、その後、生涯にわたって協会運営に中心的な役割をはたす。植物学の著作多数。雑誌の編集のほとんどはパクストンとの共同。他に*Botanical Register* (1829-47)を編集する。

**Loddiges, Conrad** (c. 1738-1826): (05) *Botanical Cabinet* (1817-1833).

種苗業者。ガーデナーとして渡英(1761年ごろ)し、1771年にハックニー (Hackney) にあった種苗場を引き継ぐ。種苗場の経営は息子のWilliam Loddiges (c. 1776-1849)とGeorge Loddiges (1784-1846)に引き継がれる。1817年から(05)を刊行し、編集と図版は息子(George)が担当。

**Loddiges, George** (1784-1846): (05) *Botanical Cabinet* (1817-1833).

種苗業者。C. Loddigesの次男として、ロンドンのハックニーで生まれる。FLS. 父親の種苗場を兄 (William Loddiges: 1776-1849) と経営し、また父が創刊した(05)の編集と図版製作を担当する。「ワード氏の箱」の考案者ワード (Dr Nathaniel Bagshaw Ward: 1791-1868) と息子が娘の結婚を通じて親戚関係にあり、「ワーディアン・ボックス」を使ってオーストラリアから苗を運ぶ実験をともに行った。

**Loudon, Jane (Webb)** (1807-58): (26) *Ladies' Magazine of Gardening* (1842). (36) *The Ladies' Companion* (1850-1851).

著作家、編集者。バーミンガム生まれ。17歳で親をなくし、文筆で身を立てる。20歳のときに書いた未来小説がラウドン (John Claudius Loudon: 1783-1843) の眼にとまり、二年後に結婚後はラウドンの有能な秘書兼口述筆記者として活躍する。夫の死後、残された原稿を整理して出版し、また大著『園芸百科』の改定作業も

行うとともに、みずからの著作を次々に刊行して夫の負債を返済する。著書に *Young Lady's Book of Botany* (1838); *Gardening for Ladies* (1840); *Ladies' Flower Garden* (1840-48), 4 vols; *Botany for Ladies* (1842); *British Wild Flowers* (1845) など。

**Loudon, John Claudius** (1783-1843): (09) *Gardener's Magazine* (1826-43). (12) *Magazine of Natural History* (1828-1836). (17) *Architectural Magazine* (1834-1838). 職業ガーデナー、ジャーナリスト、百科辞典編集者、作家。FLS. スコットランドのラナークシャー州Cambuslang生まれ。父親は農民。種苗場に徒弟奉公しながら独学で植物学、フランス語、イタリア語などを学ぶ。1803年にロンドンに居を移し、著作活動をはじめ。1806年、23歳でリンネ協会会員に選出。故郷の農業の技術を教える農業学校に成功し、その資金で大陸旅行をしたが投資に失敗。その後、主著『造園百科(Encyclopedia of Gardening)』(1822年)をはじめ、数々の著書を刊行し、また二種類の雑誌を創刊した。造園としては「ガーデネスク(gardenesque)」様式の考案で名を残す。英国で最初の公園(public park)を設計し、また公共墓地やロンドンの緑地帯の提案や設計でも知られる。温室建築でも鉄骨について技術革新に業績があった。本や雑誌の刊行で資金繰りに苦労すると、大土地所有者階級の庭園設計と造園で資金調達すつとということを繰り返し、若いころからの病弱(リウマチ熱)もあって、満身創痍の壮絶な生涯を送った。妻はジェーン・ラウドン(Jane (Webb) Loudon :1807-58)。

**Main, James** (c. 1765-1846): (14) *Horticultural Register* (1831-36). ただし上のハリソンが抜けた後(1835-36年)。

職業ガーデナー。エディンバラ生まれ(?)。東インド会社のGilbert Slater (c. 1753-93)の依頼で中国で植物を採集(1792-94)した後、ロンドンのMile End Roadにあった種苗場のArchibald Thomson (c. 1753-1832)に雇用された。*Villa and Cottage Florist's Directory* (1830)ほか、数冊の著書がある。

**Marnock, Robert** (1800-89): (21) *Floricultural Magazine and Miscellany for Gardeners* (1836-42). (28) *United Gardeners' and Land Stewards' Journal* (1845-47).

職業ガーデナー。FLS. スコットランドのアバティーンシャー州Kintoreに生まれる。イングランド北部の庭園や植物園のガーデナーをした後、リージェント・



パークの王立植物学協会 (Royal Botanic Society) の庭園の園長となる (1840-69)。William Robinsonは彼のもとでガーデナーとして働いていた (1861-67)。当時の指導的な風景式庭園デザイナーの一人で、数多くの庭園を設計した。

**Maud, Benjamin** (1790-1864): (08) *Botanic Garden* (1825-1850). (20) *The Botanist* (1836-1842).

薬剤師で、出版・印刷・書店を経営 (at Bromsgrove in Worcestershire)。FLS.ワイト島 Sandown生まれ。(08)は26年で13巻、(20)は7年で5巻なので、いずれも分冊刊行物かもしれない。他に *Floral Register* (1835-50)がある。

**Moore, Thomas** (1821-87): (32) *Florist* (1848) の後身雑誌を編集 (and possibly William Paul). (37) *The Gardeners' Magazine of Botany, Horticulture, Floriculture and Natural Science* (1850-1851) with W. P. Ayres. (39) *The Garden Companion and Florists' Guide* (1852) with W. P. Ayres. (49) *Floral Magazine* (1861-81).

植物学者。FLS. ロンドン植物学協会会員。サリー州ギルフォード (Guildford) に近いStokeで生まれる。ガーデナー見習いの後、種苗業者やリージェント・パークの庭園の仕事をする。1848年、リンドリーの支援を受けて、チェルシーの薬種商連合会 (the Apothecaries' Company) の庭園の園長に任命される (プラント・ハンターとして有名なRobert Fortune (1812-80)の後任)。雑誌の編集で活躍し、上記のほか、*Gardeners' Magazine*の編集長を二年間つとめ、1866年から82年まで *Gardeners' Chronicle*を共同編集した。植物学者としての専門はシダ類で、その膨大な標本は死後、キュー植物園の標本室が購入した。

**Neville, J. T.** (????-????): (35) *Gardeners' Hive* (1850). (41) *Gardener's Record and Amateur Florist's Companion* (1852-54).

?????

**Paxton, Sir Joseph** (1803-65): (14) *Horticultural Register* (1831-36). (18) *Paxton's Magazine of Botany and Register of Flowering Plants* (1834-1849). (25) *Gardeners' Chronicle (and Agricultural Gazette)* (1841-1969).

職業ガーデナー、建築家、編集者。FLS. ベッドフォードシャー州ウォバーン (Woburn) に近いMilton Bryantで、農家の七男として生まれる。ガーデナーとしての最初の仕事はSir Gregory Page-Turnerの邸宅の庭園で、1823年にチズウィック

に新たに開園した園芸学会の庭園に移り、さらに二年後にはチャツワースのデヴォンシャー公の庭園の主任ガーデナーとなる。デヴォンシャー公の厚い信頼と、資産家の娘との結婚(1827年)によって仕事の範囲を広げていき、とくに鉄骨とガラスを組み合わせた巨大温室の設計と監督の経験は、1851年のロンドン万博の会場「水晶宮(クリスタル・パレス)」として結実する。これらの成功により各地の大規模公園の設計依頼が舞い込み、1854年には下院議員に選出された。

**Perry, C. J.** (c. 1822-73): (40) *Birmingham and Midland Gardeners' Magazine* (1852-53) with J. Cole.

フローリスト(バーミンガム)。専門はダリア、ヴァーベナ、バラ。クロニクル誌の寄稿者。

**Reeve, Lovel** (1814-65): (49) *Floral Magazine* (1861-81)を創刊した発行人。

出版業、貝類学者。ロンドンのラドゲート・ヒルLudgate Hill生まれ。(48)のほか、1845年から65年(他界)まで、(2)「カーティス・ボタニカル・マガジン」の発行人。当時の主要な科学書出版社。

**Robinson, William** (1838-1935): (54) *The Garden* (1871-1927). (55) *Gardening Illustrated* (1879-1956). (56) *Woods and Forests* (1883-85). (61) *Cottage Gardening* (1892-98). (65) *Flora and Sylva* (1903-05).

職業ガーデナー、編集者、園芸ジャーナリスト。FLS. 北アイルランドのダウン州生まれ。いくつかの庭園の庭師をした後、ロンドンのリージェント・パークにあった王立植物協会の庭園のRobert Marnockのもとで働き(1861-67)、この間に英国の自生植物や田園地帯のコテージの庭先の植物を調査する。その後、フランスとスイスの旅行を経て、Wild Gardening or Natural Gardeningという様式を提唱する。ガートルード・ジークル(Gertrude Jekyll: 1843-1932)を見出したことでも知られる。Wild garden (1870); English Flower Garden (1883)など著書多数。

**Sanders, Thomas William** (1855-1926): (59) *Amateur Gardening* (1884~現在)を引き継ぐ(1887-1926)。

園芸ジャーナリスト。FLS. ウスター州Martley生まれ。Sanders' Encyclopedia of Gardening (1895)ほか、著書多数。

**Sladden, John** (????-????): (43) *Gossip of the Garden* (1856-63)を引き継ぐ (with

William Dean & A.S.H.)。

???????

**Smith, Frederick W.** (1797-1835): (19) *Florist's Magazine* (1835-56).

植物画家。ロンドンで細密画家 (Anker Smith) の息子として生まれる。兄弟の Edwin Dalton Smith (fl. 1820s-1840s) も植物画家。Paxtonの *Magazine of Botany* と R. Sweetの *British Flower Garden* の挿絵も描く。

**Smith, Robert** (1811-1881): (11) *Florist's Guide* (1827-1832).

経歴その他不明だが、兄弟の仕事から考えて絵師ないし編集者だろう。絵師は Edwin Dalton Smith (fl. 1820s-1840s) で、R. Smithの刊行物のほか、B. Maundの刊行物の絵も担当。兄の Frederick William Smith (1797-1835) も植物画家でロンドン生まれ。

**Spencer, John** (1809-81): (32) *Florist* (1848). 編集補佐 (1851年～)。

職業ガーデナー (ランズダウン卿 Lord Lansdowne の庭園)。英国果樹学協会の創設会員 (1854年)。ガーデナーズ・クロニクル誌へ多数寄稿。

**Sutton, Alfred G.** (c. 1818-97): (31) *Midland Florist* (1847-63) の編集を引き継ぐ。

兄の Martin Hope Sutton (1815-1901) は、バークシャー州レディング (Reading) に John Sutton (1777-1863) が設立した種子商サットン商会 (Sutton and Sons) の二代目で、ヴィクトリア女王に信頼されてウィンザー城の庭園などについて助言した。弟のアルフレッドは兄が拡大した商会の事業 (農産物種子を専門としていた商会に花卉や野菜の種子も加え、また郵送による販売も開始した) を手伝い、それらの事業は三代目に引き継がれ今日にいたっている。

**Sweet, Robert** (1783-1835): (06) *Geraniaceae* (1820-1830): (07) *British Flower Garden* (1823-1838). (11) *Florist's Guide* (1827-1832).

種苗業者。FLS. デヴォンシャー州 Torquay に近い Cockington 生まれ。異母兄 (Sweet, James) のガーデニングと種苗業を手伝った後、1812年から26年までチェルシーの種苗店 (Colvills) を共同経営する。その後、みずからの種苗場をいとなくむとともに、園芸に関する数多くの著作を出した。(6) は11年で5巻、(7) は5年間で7巻、(11) は6年で2巻なので、いずれも分冊刊行物だろう。他にも分冊刊行物をいくつか出している。

**Thomson, David** (1823-1909): (52) *Gardener* (1867-82) を William (父親?) から引き継ぐ。

職業ガーデナー、園芸作家。スコットランド西岸沖のマル (Mull) 島 Torloisk で、執事の息子として生まれる。学校教育はほとんど受けていない。スコットランドやイングランドの大きな邸宅の庭園などの主任ガーデナーを歴任。パイナップルなど果樹の温室栽培やフラワー・ガーデンの著書がある。雑誌 *Scottish Gardeners* を編集 (1854-82)。RHS の Victorian Medal of Honour を受賞 (1897)。

**Thomson, William** (1814-95): (52) *Gardener* (1867-82)。

職業ガーデナー、ブドウ栽培家。スコットランドのロクスバラ州 Bowden 生まれ。*Scottish Gardeners* という雑誌も編集していた。

**Turner, Charles** (1818-1885): (32) *Florist* (1848) を 1851 年に乗っ取る。編集補佐は John Spencer。

フローリスト、種苗業者 (バッキンガムシャー州スラウ Slough の王立種苗園 Royal Nurseries)。ソールズベリーに近い Wilton 生まれ。ナデシコのフローリストとして若くして才能を開花させ、14 歳だった 1832 年を皮切りに 1848 年までに 498 回の受賞をほこる (それ以降は数えるのをやめた)。ナデシコだけでなく、伝統的な品評会用フローリスト・フラワー全種のほか、アザレアとバラの栽培でも名を成した。また Hibberd のつる植物コレクションを購入して商品化し、またリンゴの品種「Cox's Orange Pippin」を商品化したことでも知られる。王立園芸協会の花弁委員会の委員のほか、数多くのフローリスト協会の重鎮をつとめた。著書に *Culture of the Pansy* (1850) がある。

**Westcott, Frederic** (-1861): (23) *Floral Cabinet and Magazine of Exotic Botany* (1837-1840)。

植物学者。(23) を G. B. Knowles と共同編集。

**Wood, John Fredrick** (fl. 1840s): (31) *Midland Florist* (1847-63)。

種苗業者 (ノッチンガム)。この雑誌はフローリストたちが結集して創刊。

[A.S.H] (????-????): (43) *Gossip of the Garden* (1856-63) を引き継ぐ (with John Sladden & William Dean)。